へ13
3753
14

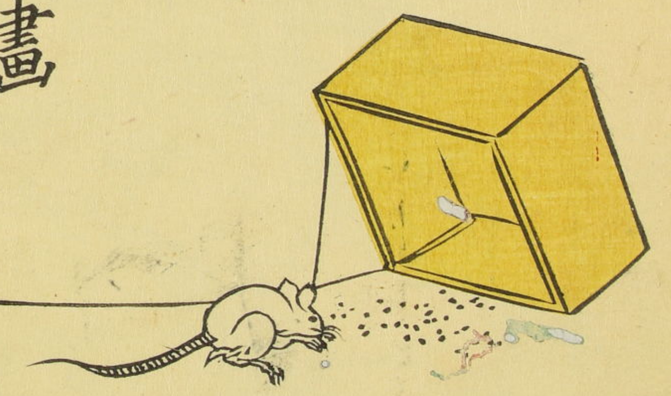
門 ベ13
3753
巻 14

琴聲美人録

十七編上

種彦著

芳員畫

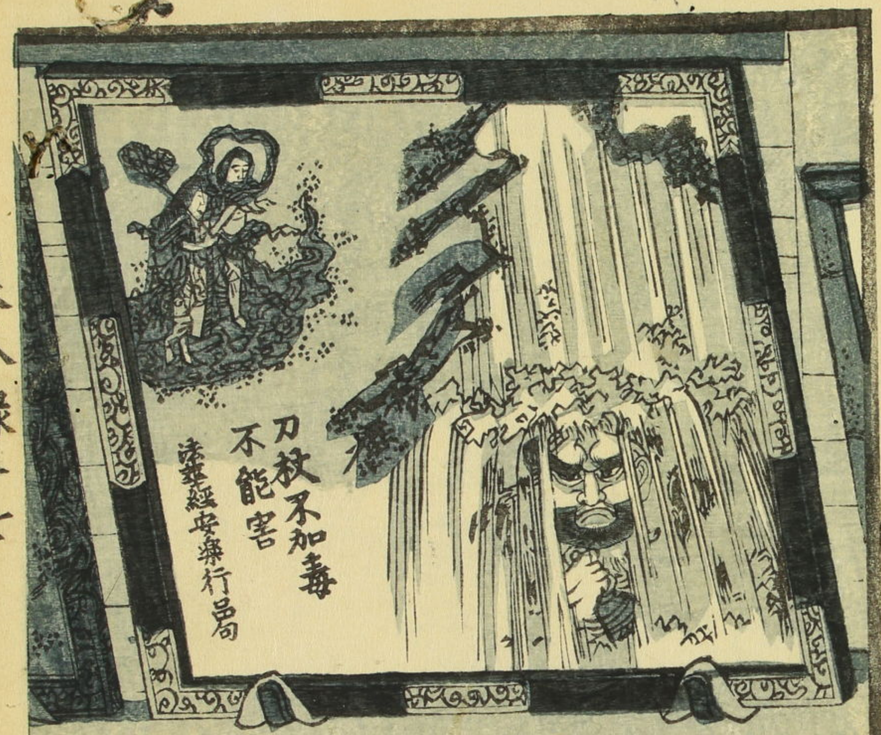


美人録第十七編序　柳亭著

於組惣次郎の草紙八京山先生近来戯作中の妙筆あるこそ惜もべし未満尾ふくろも販主金鶏の嘉例を以て余に嗣述を求ぬ嗟彼琴の声の箏絃に力あるき柳條を結つぎ〳〵に此を弾に音も出ず美人に並ぶ頽部陀顔告別と人の遁のそんなるを哂笑の種彦が名の江熟に疱も靨と見容〳〵と誘て鬼も十七十八編番茶の出花に取なさしし夜並の燈下ホ毫を酉夕ン成春の新著とすや云

故人童子訓の例を追ひ口吏ふ書いて
老婆心の繰言

人〳〵と苦へ錆るべからず有いなを憂ひ
死へ死を憂ふと鈴廼舎先生の言葉を
飢こ苦しき。富者も貧者も神や精霊があべと
苦へ絶えず。ぞうがあるべ貴賤ぶ分け。あるべ老
至るべと紀〳〵。ぢぢ。のくのまへ聞そまを
種類のらくのまもゆうへくとい語ありく
多へ苦のうひというあるべ樂をして
樂れ和ら楽をして苦を喜ば。
楽ふいうるる死れ有り異ひと富ひので
五穀も実のう。賤を痛ひべ人と考と
苦へ楽の繰とうるりを悟る神。



巻中繡像一川芳員

男髪山長が自慢を飛ばさるとも
まのあたりあるべ苦コあるべ。久兵衛の那
者の瀑布に騒ぐ苦ぐ水ぐも法の
あるべ。べ命も惜まべ手べ
苦のくひとべ行ぞ。脚絆
めて紅よのきべ風や渡り
らを痛め。
ぶ焼り
あるべ
苦の時が
いとべ。
べ楽も楽しうべ。
苦するのとべ
号廻ぬとそ▲

おかしいので おまつあんぞへ つまようり三ぜんよけいにつき きりさつて八いろ七「イヤおきちや　大 ぎよつとして喜助どのをどうだらう まアきつ[illegible]

十七編初版 [illegible]

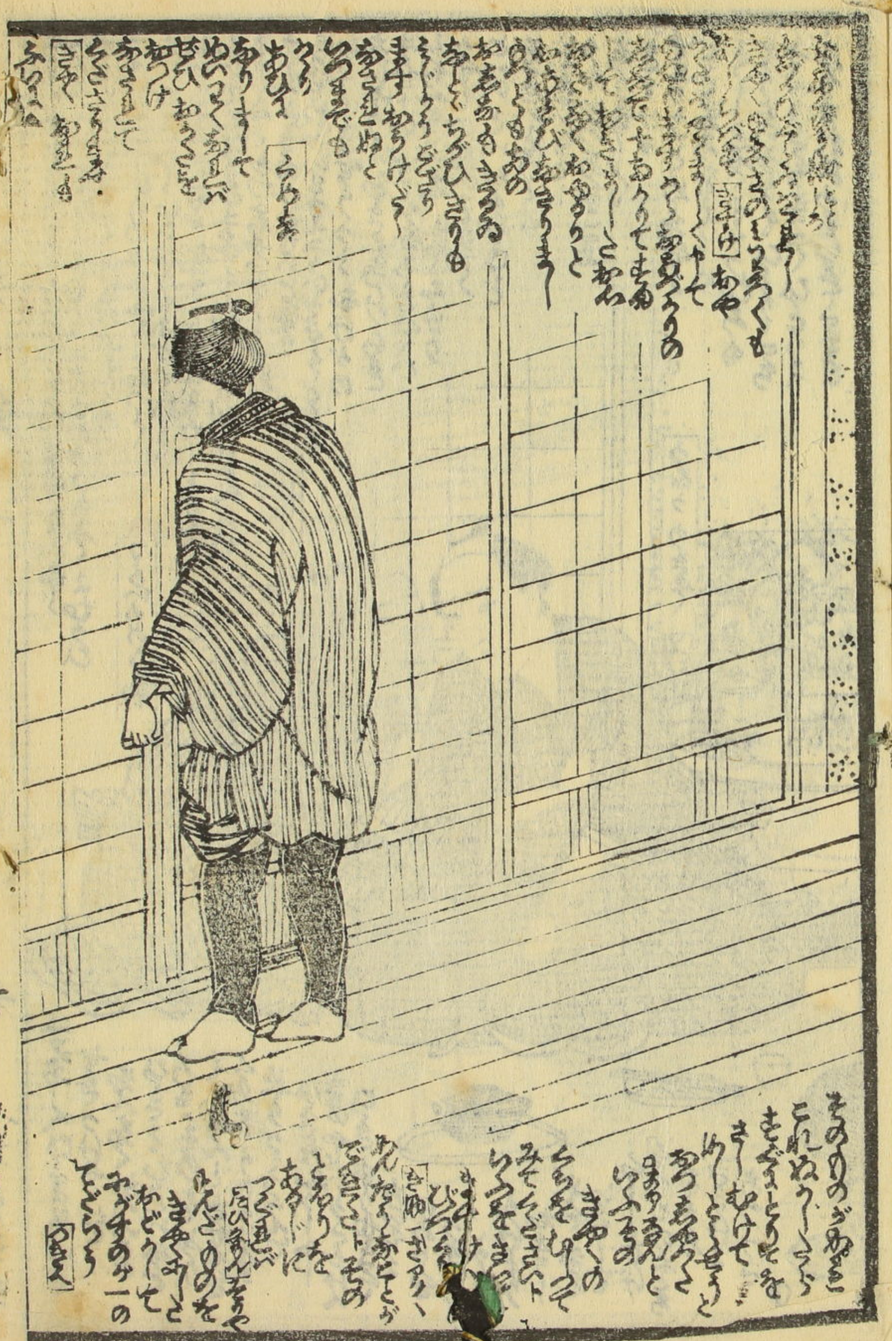
[illegible]

せんこくのにおをつけてきわく [illegible]

[illegible]

つきこまで
くめ吉

むすめ
おくのうめ



あくのうちあり

いきうの男

種彦著　芳員画

西國奇談春水補綴

國貞画

十三編八阿綾狐五郎と玄通して暗に夫れ再會の一段阿竜殺生石を祈りて身を妖術を獲るの奇談お竜龍太郎絵ほとと色に盲

十四編

緯よを言寄で反て恥辱あらるるより渠を罪せんと計るの一端

偽龍太郎の故ふるう真の龍太郎が二の町と不義せりたれ言ふれ

十五編八嶋守荒

終ふ配流せらるるの趣き並ふ節之助が忠心義膽

大夫が龍太郎を若ゑんとするより笹屋浪子の二個の蛮が竊ふ龍太郎

十六編

拔らるる段ならぬ浪子が荒太夫が強奪ふ為の物語ふと最巧を

條なるまで白地ふ美ふ記さ弁ハ出板の時ふそ知らまん

根源實紫新刻概畧

作者　柳亭種彦画工同前

十五編　紫ある完人の買し宝笛香炉偷く宣孝ふ托す野洲児詛祭さとて紫式部寃と受

十六編　式神壽祖狹手子等が隠謀を露ゝ御彦自截て式ノ汚名全雪まを黒白判然究悪皆戮せらるつぎて少將が貞節惟規北国

十七編　ある死て又蘊ある大貳三位生れ宣孝病死花山法皇の御傳大くと此編て全備や式部源氏物語を作や上東門院ふ奉公

十八編　以下遊て記ま

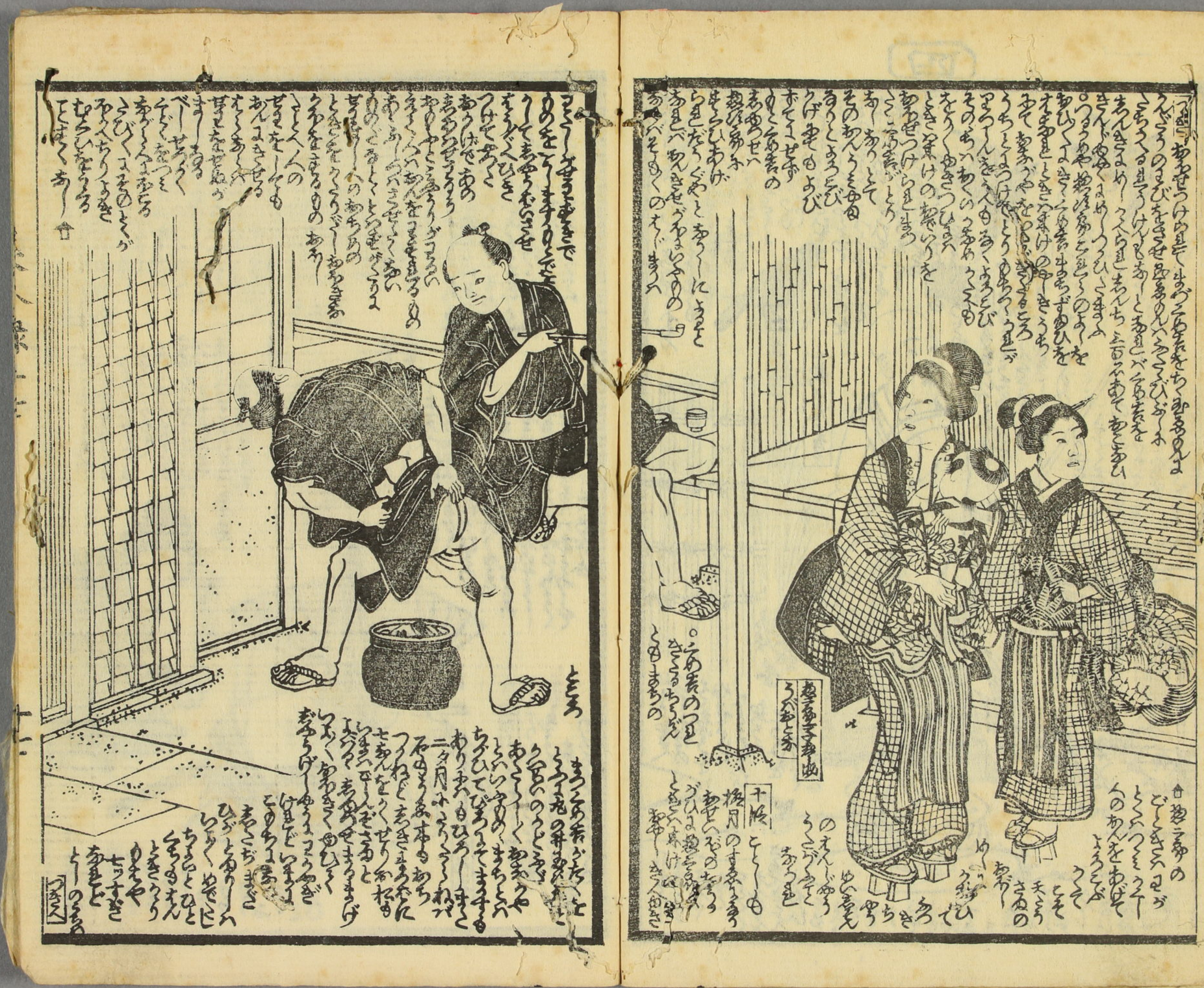
柳亭種彦編述
一川芳員画
下

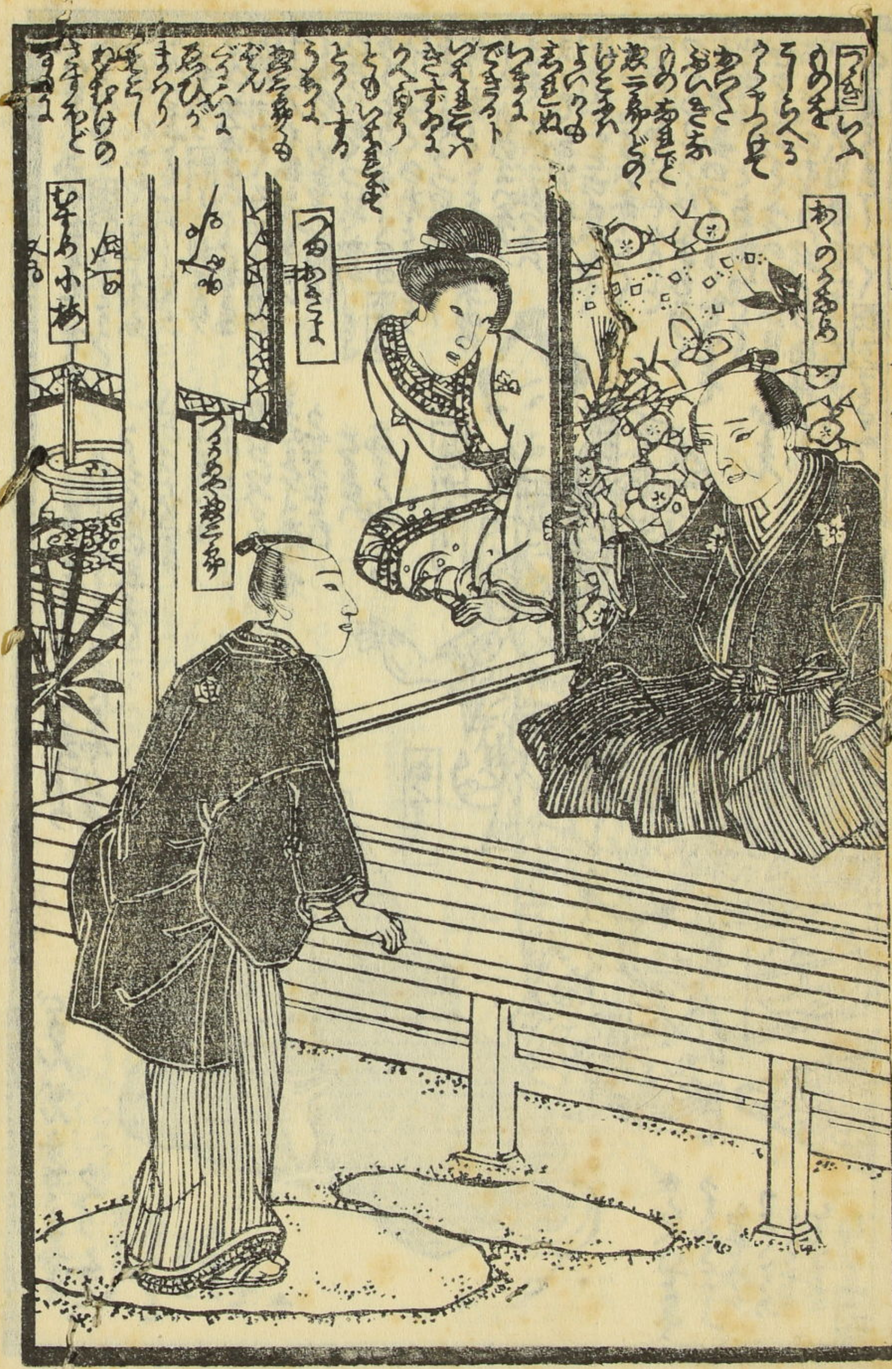
美人録
十七編
下冊

美人録十七
十一

江戸高砂
おつる
くめ吉

おつる尾上
五郎





第二番
小物

十一版

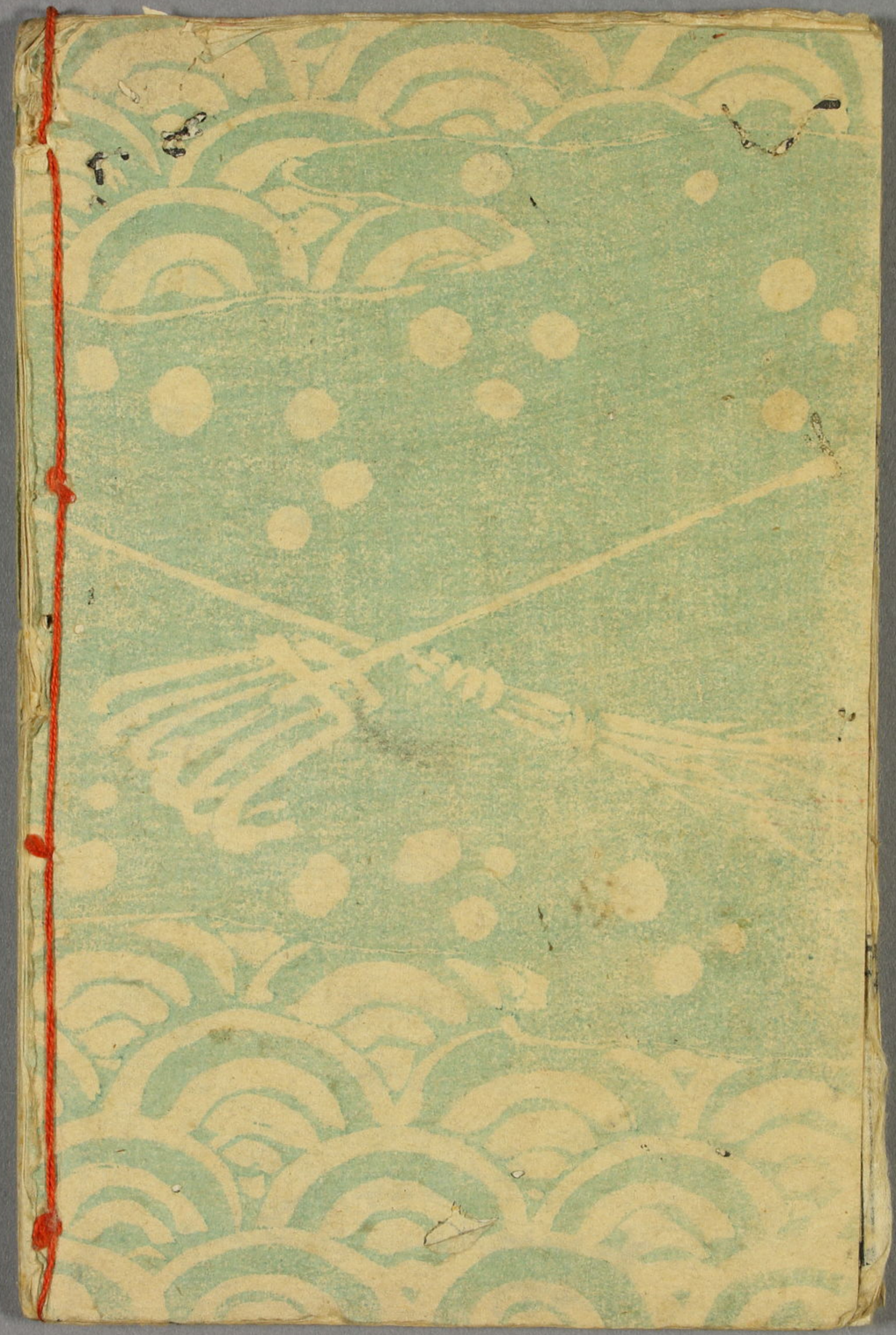
文久二戌年新鐫目録

根源實紫　十五編　柳亭種彦作　十六編　十七編　一壽齋國貞画

娘庭訓金鶏　五編　同作　大尾同画

總次郎琴聲美人錄　十七編　山東京山作　十八編　柳亭種彦作　十九編　歌川國貞画

花兄弟陸奥名所　初編　柳亭種彦作　二編　歌川國貞画

新增補西國奇談　十三編　爲永春水作　十四編　十五編　歌川國貞画

地本繪草紙團扇問屋　芝神明前三嶋町　佐野屋喜兵衛板